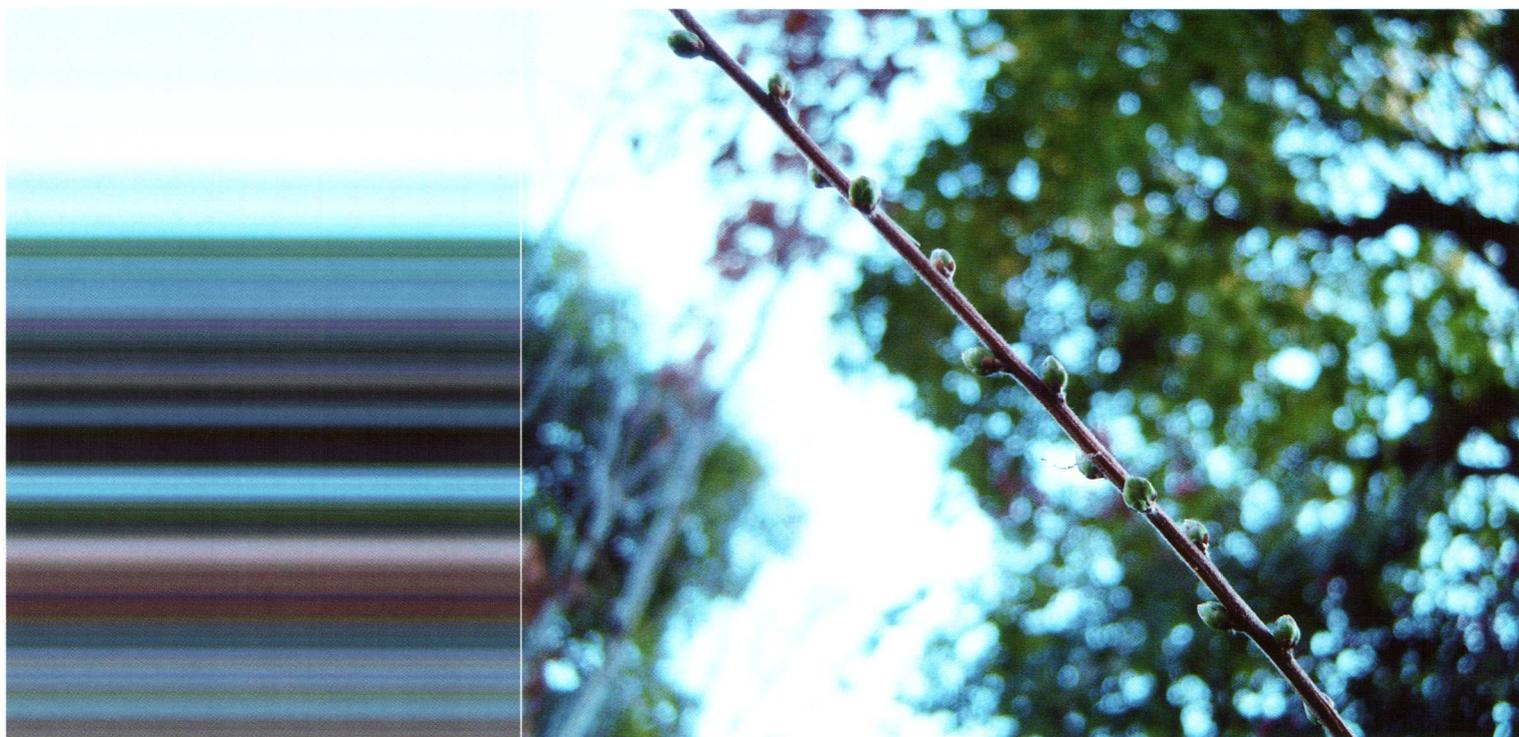


KIHS



NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所
Konan Institute of Human Sciences



甲南大学人間科学研究所が甲南大学18号館に開設されてから、1年が経ちました(2002年11月開設)。

当研究所では、「現代人の心の危機」を総合的に研究するという理念のもと、

日々さまざまな研究活動が活発に行われています。

甲南大学人間科学研究所では、研究者や学生を主な対象とする研究会以外にも、

地域の方々を対象とするシンポジウムやワークショップを行っています。

今年度には2回の公開ワークショップを行いました。第2号ではその模様をレポートします。

教師のための茶の湯による癒し



講師／ 富士田 宗啓 (裏千家業跡部)

日時／ 平成15年11月15日 (土)

場所／ 18号館 和室

茶

の湯は、連歌との関連から芸能として論じられたり、あるいは禅僧栄西が宋代の喫茶法を紹介して以来日本の喫茶が定着したことから、茶禅一味^{*}と解かれたりします。近代に入ってから、宗教や倫理的枠組みが変質するなかで、遊びの一つとして位置づけられ、資産家や知識人の間で趣味として道具を集め折々に茶会が催されました。このように茶の湯は様々な側面から語られますが、いずれにしても茶の湯を十全に表現し得たわけではなく、むしろそれらは茶の湯が極めて複雑な要素を持ちあわせていることを明白にしています。しかし、それらの中で共通していることは、芸能であれ宗教であれ趣味であれ、茶の湯が日本人の心を捉え豊かな内的世界を体験する心の作業であるといえることです。

そこで、甲南大学人間科学研究所では今回、「教師のための茶の湯による癒し」と題したワークショップを、阪神地区の小中学校の先生とスクールカウンセラーの方々を対象に、裏千家業跡部富士田宗啓先生を迎えて行いました。当日は、甲南大学18号館にあるグループワーク室が茶室としてしつらえられました。床には富士田先生御持参の軸(大徳寺管長小田雪窓師筆)「松高白鶴眠」がかけられ、同じく400年の

歴史を持つ瀬戸祖母懐(瀬戸近郊の地名で陶器用良土を産する村の名)で裏千家大宗匠によって「香楽」と銘付けられた壺と、一輪ざしに生けられた初嵐(白い椿)が飾られ、荘重な雰囲気の中で小講義が始められました。

茶の湯は400年以上前に茶道として確立されて以来、主に武家や町人の間で綿々と受け継がれ現在に至っています。特に11月は茶人にとって特別の月で、正月以上の重事とされています。春に摘み取られた新茶は、葉茶のまま詰茶され、暑い時を壺の中におかれ、涼気に至たる11月に茶家に渡り、口切の茶事を迎えます。口切の茶事とは、封印された壺の蓋を切り、茶臼で茶を挽き抹茶を点でて客をもてなす、いわば茶の点て初め式です。茶事は茶席という非日常の世界に客を招きいれてもてなすことで、森羅万象すべてのものとつながると同時に、主客の関係を築いてゆく作業であると説明されました。その後、茶壺に納められている袋茶や詰茶を拝見し、先生のお点前で炭を次ぎお茶を点でて頂き、一同は豊かな非日常の時間を体験しました。参加者からは、このような催しが今後開催されることへの期待が、多数寄せられました。

^{*}茶と禅は形こそ異なるけれど、人間形成という本質において同じであるということ。

トラウマ臨床の理論と実践 —精神分析的アプローチ—



講師／田中 健夫(九州大学学生生活・
修学相談室、高等教育総合開発
研究センター)

ファシリテーター(グループワーク)／
森 茂起(甲南大学文学部教授・人間科学
研究所所長)

羽下 大信(甲南大学文学部)

橋本 和典(PAS心理教育研究所)

日時／H15.12/6(土)・12/7(日)

場所／甲南大学18号館3階 講演室

近

年、トラウマをターゲットにした様々な治療技法、援助技法が日本に紹介され、実際に臨床場面でも用いられています。しかし、トラウマの臨床ではまずトラウマを負った人々の心的状態をどのように理解するかが課題になります。

今回、甲南大学人間科学研究所では、イギリスのタビストック・クリニック※でトラウマ臨床の研修を1年間経験された田中健夫先生をお招きし、2日間のワークショップを開催しました。対象は日頃臨床実践にあたっている地域の臨床心理士の方々です。田中先生によるトラウマの精神分析的な理解の枠組みの紹介とともに、参加して下さった16名の臨床心理士の方々と、グループワーク、ケーススタディを通じて理論を実践に結びつける試みを行いました。

ワークショップ1日目には、参加者が過去にもった自分自身のトラウマ体験を振り返るグループワークを行いました。トラウマへの対処法、回復過程を体験的に考えることが目的です。そのあと、イギリスBBC放送で放映されたタビストック・クリニックにおけるトラウマへの治療的介入を紹介したビデオを参照しながら、トラウマへの精神分析的アプローチの実際を学びました。2日目には、トラウマ理解のための精神分析理論と主要な概念を学んだあと、トラウマ臨床のケーススタディを行いました。

講義のなかで、トラウマのもたらす影響のひとつとして「考える」機能の損傷があげられました。トラウマを受けた人は、体験を言葉に置き換え体験から距離をおくことができなくなります。起こったことを「思い出すこと」がそのままトラウマの追体験となり、それはときに生々しい死の不安を呼び起こしてしまいます。精神分析理論は、言葉を用いてそのような強烈なトラウマ体験を組織化していくことに貢献できると田中先生は説明されました。また、クライアントとともにトラウマを追体験することになる治療者自身にとっても、理論は有用なものであることが強調されました。

トラウマ臨床にあたる治療者には、精神的な負担が大きいのしかかってきます。今回のワークショップで、参加者は普段の臨床の場面を振り返ってさまざまなことを感じ、考える機会を得られたようです。「このような企画がまたあれば是非参加したい」という声も多くありました。このたびのワークショップで、治療者のための企画がもっと必要であることが、主催者の側にも改めて認識されました。

※タビストック・クリニックは、ロンドンにある精神分析的な精神療法に関する研究所として国際的に有名な施設です。イギリスの国民医療制度のもとにおかれているため、クリニックを訪れる人々はすべての医療サービスを無料で受けることができます。



※これまでの活動

平成15年9月～平成16年1月

研究会

- 第6回 ジェノサイド・メンタリティとトラウマ —批評理論からのアプローチ—
日 時 / 平成15年11月21日(金)
講 師 / 下河辺 美知子(成蹊大学)
- 第7回 災害とこころのケア —8年間の実践と今後の展開—
日 時 / 平成16年1月16日(金)
講 師 / 加藤 寛(こころのケア研究所)
- 第8回 〈狼男 Wolf Man〉をめぐる人々
日 時 / 平成16年1月30日(金)
講 師 / 福本 修(恵泉女学園大学)
パネリスト / 森 茂起(甲南大学)、港道 隆(甲南大学)

研修会

- 第2回 園芸療法研修会(2) 園芸療法の実践 —モーニングワークにおけるヒーリング・ランドスケープ—
日 時 / 平成15年10月17日(金)
講 師 / 浅野 房世(姫路工業大学、兵庫県立淡路景観園芸学校)
- 第3回 教師のための茶の湯による癒し
日 時 / 平成15年11月15日(土)
講 師 / 富士田 宗啓(裏千家業躰部)
- 第4回 トラウマ臨床の理論と実践 —精神分析的アプローチ—
日 時 / 平成15年12月6日(土)・12月7日(日)
講 師 / 田中 健夫(九州大学学生生活・修学相談室、高等教育総合開発研究センター)
ファシリテーター / 森 茂起(甲南大学)、羽下 大信(甲南大学)、橋本 和典(PAS心理教育研究所)

※これからの活動

平成16年7月～

公開シンポジウム

- 第1回 トラウマ概念の再吟味 —埋葬と亡霊—
日 時 / 平成16年7月25日(日) 時間未定
場 所 / 甲南大学
共 催 / こころのケア研究所
シンポジスト / 白川 美也子(国立療養所天竜病院小児神経科、精神科/精神医学)
(予定) 加藤 寛(こころのケア研究所/精神医学)
高橋 哲哉(東京大学/哲学)
森 茂起(甲南大学文学部/臨床心理学)
- 指定討論者 / 中井 久夫(こころのケア研究所/精神医学)
(予定) 港道 隆(甲南大学文学部/哲学)
- 司 会 / 横山 博(甲南大学文学部/精神医学、臨床心理学)
(予定)
- 第2回 感性の変容(仮題) 平成17年夏開催予定



【編集後記】

KIHSニュース・レター第2号をお届けします。
暖冬とはいえ、さすがに寒さの底を迎えるこの時期には耳の痛くなるような寒い日もありますね。寒いのは大の苦手のくせに、池に氷がはったり雪が舞ったりすると、ちょっと嬉しくもなります。嬉しくなっても、「庭、駆けまわり」とはいかず、せいぜい窓から眺めるくらいなのですが。しばらくはまだ寒い日が続きます。風邪などひかれませんよう、お身体には十分ご注意ください。
桜の季節には第3号でお目にかかれることと思います。